

## 幼児期における方言動詞アスペクトの形成

— 2, 3歳期双生児のばあい—

江 端 義 夫

はじめに

この小考は、地方都市に生まれた子どもが、自己の言語体系をどのように形成していくかという課題研究の一端である。地方に生まれ育った子どもが、どのように地方語で表現する能力を習得していくかを研究する。それは同時に、方言体系をどのように形成していくかという課題研究でもある。そして、世界の幼児に共通な言語形成の理の解明をめざしたい。

従来の方言研究は、既に地方語の体系が確立された12歳以上の人々の生活語を、研究の対象としてきた。これは、いわば日本語の変種や文体差について、その体系と歴史とを考察するものであったと言えよう。方言を、このように固定的にとらえることに問題があると思う。方言社会の諸問題は、系統的かつ総合的に考えられるべきである。

本当の言語研究は、幼児の言語獲得や児童のことばの研究を無視しては、ありえないのではないかと、筆者は考える。残念ながら、ことばを模倣する、ことばを習得する、ことばを創造する、ことばを楽しむ、などの人間的行為を、方言研究の世界の問題として正しく位置づけ、取り組んだ例を、あまり聞かない。

生まれてから死ぬまでの生涯の間に、言語表現能力が、社会との関わりで、どのように発現し、展開していくかを学問の射程内にとりこみたいと考えている。このような巨視的な立場を『人間表現学』、または『生活言語学』と仮称してみることができよう。

以上の理念に立って、筆者は一実践研究として、小考に従うものである。

高橋太郎氏は、『幼児語の形態論的分析——動詞・形容詞・述語名詞』

(国立国語研究所報告55, 秀英出版, 1975)で、「この研究で最初に意図した発達の過程は、もとめられなかった。これをとらえるためには、1.5歳から4歳にいたる個人の言語習得過程をおわなければならないだろう。もしそのような方法で分析されるならば、すくなくとも、形態論の範囲のなかでは、子どもによって、文法形式のどのような部分からどのような過程で習得されていくかがとらえられるだろう。」(4頁)と、述べておられる。

筆者は、独自に、昭和48年12月11日生まれの双生児の言語発達を、自然発話の記録を中心として観察していた。それは期せずして、高橋氏のばあい(実際は大久保愛氏の研究資料であるそうだが)とよく似た方法であったのである。氏の分析された言語資料は、3歳～6歳児であったが、筆者が以下でとりあげるのは、2歳0ヶ月～3歳11ヶ月までのものである。なるべく、方法を氏のものに近づけることによって、比較が可能なように心掛けることとした。このようにして、一地方都市の幼児の言語発達を、動詞アスペクトの形成という一点で、分析記述につとめたいと思う。

動詞アスペクトの形成では、日本語の基本形態としての動詞のアスペクトに、更にかぶさるように、地方の方言共時態の動詞アスペクトが複合していることが予想されるので、それらの全体をとらえて、方言動詞アスペクトとも称することができよう。

言語資料は、先述の昭和48年12月11日に、広島県福山市引野町で生まれた、双生女児の江端愛子(略称A)、江端観世子(略称M)、の自然会話による。彼らが2, 3歳期に発話したことばを記録したカードが、約1万2千枚ある。それらの中から、小考での該当事象をとり出して、以下の考察を行った。(略称Kの発言とあるのは、昭和47年12月24日生まれの長女、江端貴与子の表現である。)

2, 3歳期双生児の方言動詞アスペクトは、次表のようにまとめられる。

## A 補助動詞を使うもの

### 一 持続動詞のアスペクト

(→ 「動詞(連用形) + テル」

語形成	アスペクト	形 態	用 法
A、 補助動詞を使うもの	一持続動詞の アスペクト	(一)「動詞(連用形)+テル」	①進行の状態 ②結果の状態 ③単なる状態 ④反復 ⑤経験
		(二)「動詞(連用形)+テイル」	
		(三)「動詞(連用形)+トル」	
		(四)「特殊な表現」 ①「～テルアル」 ②「イテテ」	
	二結果動詞の アスペクト	(一)「体言(が)+動詞(連用形) +テアル」	
		(二)「話材の当然の共有」	
		(三)「アル」と「イル」との相通	
	三処置動詞の アスペクト	(一)「動詞(連用形)+トク」	①状態維持 ②放随 ③準備 ④一次的処置 ⑤意志的動作 ⑥先行する行為
		(二)「動詞(連用形)+テオク」	
	四終結動詞の アスペクト	(一)「～チャツタ(～チャウ)」	①動作の終了 ②動作の意志 的完結 ③動作の消極的完結 ④反射的動作 ⑤反期待動作 ⑥新事態動作
		(二)「～タツタ」	
		(三)「～テシマツタ」	
五到来動詞・ 退去動詞の アスペクト	(一)「動詞(連用形)+テクル」	①現出過程 ②変化過程 ③動作・作用の開始	
	(二)「動詞(連用形)+テイク」	①変化過程 ②連動的動作	
六実現動詞の アスペクト	(一)「動詞(連用形)+テミル」	①試行動作 ②体験動作	
	(二)「動詞(連用形)+テミー」		
B、 を 使うもの 接尾辞	一将然動詞の アスペクト	(一)「動詞(連用形)+ヨル」	
		(二)「動詞(連用形)+ソーナ」	
		(三)「動詞(連用形)+ヨートスル」	
		(四)「動詞(連用形)+ヤメタ」	

この言い方の極めて多いことが、注目される。

①「進行の状態」

これは、2歳5ヶ月ぐらいから盛んに使用されるようになった。当該双生女兒には、2歳4ヶ月ごろまで、はかばかしい文法分化が見られなかったが、2歳4、5ヶ月から堰を切ったように、種々の文が表現されだした。

<2:5, 昭51.5.28, 1:11 p.m., アパートの隣家の子の泣き声に>

M○ダレガ ナイテル ブ。誰が泣いているの？

A○マチチャン ナイテル ブ。真樹ちゃんが泣いているの？

母○ンー。ソーソー。うん。そうそう。

<2:5, 昭51.5.12, 7:43a.m., 朝食中のこと>

K○ゴチチョーチャマデチタ。ごちそうさまでした。

父○ハイ。オリコー。はい。おりこう！(→K)

M○ミヨコ マラ タベテル ネー。観世子(私)は、まだ食べているね。(→父)

動詞としては、他に「考える、する、やる、切る、歩く、言う、拾う、乗る、歌う、泳ぐ、体操する、片付ける、なめる、書く、遊ぶ、笑う、走る、使う、運転する、鳴らす、行く、帰ってくる、待つ、お医者さんする、降る、焼く、話す」などが見られた。

## ②「結果の状態」

ある動作の必然的な結果が持続している状態を表す言い方が、よく聞かれる。やはりこれも、2歳4ヶ月に至って頻出する。

<2:4, 昭51.5.10, 8:38p.m., 就寝前の会話>

M○カーチャンモ ネテル カー。お母さんも、寝ているか？(→母)

母○サキニ ネルノガ オリコー ヨ。皆より先に寝る子が、おりこうよ。(→M)

<2:5, 昭51.5.21, 8:57a.m., 朝食のパンを見て>

A○バター チュイテル ネ。パンにバターが付いているね。(→父)

<3:6, 昭52.6.24, 6:35 p.m., 友達の家にある新幹線の玩具がこわれた>

A○シンカンシエンガ メゲテタ。周君の家の新幹線の玩具が壊れていた。

A○メゲテルノワ オトナダケ。壊れているのは大人だけ。(→母)

母○新幹線がどうなっていたの？

A○メゲテル。壊れている。

母○コワレトッタ コト。壊れていたこと？

A○ンー。うん。

母○お父さんは、メゲテルということばが広島弁だから、分からないんだって。

A○アシタ ミテクル。明日、見てくる。

3歳台になると、方言をも習得して、自在に使用できるようになる。

結果の状態を表す動詞として、「開く、出る、開ける、起きる、はずれる、持つ、出す、成る、残る、鳴る、落ちる、映る、こげる、こわれる、上る、はがれる、枯れる、つなぐ、来る、炊く、濡れる、帰る、着る、待つ、止まる、沈む、上げる、置く」などが見られた。

### ③「単なる状態」

ものごとに備わったある状態を描述する言い方がある。これは、①②に比べれば少ないが、既に、2歳半ばかり聞かれる。

<2:7, 昭51.9.18, 11:45a.m.>

A○モヨーガ チユイテル。模様がついている。

父○ナンブ。何の？

A○アーナノ モヨー。あんな模様。

M○オシャカナ。お魚？

<3:4, 昭52.5.4, 7:52a.m., 紅葉の模様の茶碗を見て>

M○コレ ナニデ デキテル ノ。これは、何でできているの？

父○ツチデ デキテル ノヨ。土でできているのよ。

M○コワレル ノ。壊れるの？

A○コワレヤシュイ ノ。壊れ易いのよ。

父○コワレヤスイ。壊れやすい。

複合語を使用して、微妙な表現の綾を出すことができるようになってきている。

### ④「反復」

<2:6, 昭51.6.22, 8:30a.m., 録音器が回転作動している様を見て>

M○クルクル マガッテル。くるくる回っている。

<3:0, 昭52.1.6, 6:12p.m., 夕食中, Aが鶏肉をつついているのをMが見て>

M○アー チクチク ヤッテル。あれ、ちくちく、つついている。  
回転状況や動作のくり返しを表現するものである。

⑤「経験」

先述の著書で高橋氏は、幼児の発話に、これを認めえなかったとされた。ところが、筆者は、知覚動詞の「知る、分かる」は、既知事態を表現するばあいには、経験の叙述になっているのではないかと思う。

<3:3, 昭52.3.20, 6:05p.m., 夕食中, 皿の上のサラダを残らずきれいに食べようとして>

M○キレーニ シテー。きれいによせ集めて。(→母)

母○マダ タベル ノ。まだ食べるの?(→M)

父○アンタ ゴハンガ ノコッテル ヨ。あなた、サラダの他に、ご飯が残っているよ。(→M)

M○アトカラ タベル ノヨー。シッテルデシヨ。後からご飯は食べるのよ。もう知っているはずでしょ。(→父)

母○えらそうに。(→M)

「シッテル」は、結果の状況でも反復でもなく、経験であろう。当為と考えられもする。

<3:3, 昭52.3.30, 8:58p.m., 着替えの場面で、既にAとKとは着替えが済み, Mのみが遅れている>

母○早く着替えなさいって, Mに言っておいで。(→K)

K○ハヤク キガエナサイ。早く着替えなさい。(→M)

M○ワカッテルカラ イー。分っているから結構。(→K)

K○ワカッテルカラ イーンダッチ。分っているからいいんだって。(→母)

さて、動作の持続、継続を表す動詞(～している)の用法の5態を記述してきた。これらが、すべて、形態として「～テル」であり、「～テイル」が皆無であることが注目される。しかし、双生児のA、Mおよび1歳年上のKが、これらを不使用だったのではなく、極めて稀に、「～テイル」を使用したという理由による。たとえば使用例は、次の通りである。

□「動詞(連用形)+テイル」

<3:3, 昭52.4.5, 6:15p.m., 帰宅した父に, その日の出来事を話す>  
 M○ペンペングシャガ ネー。ハッチャンノ ウチニ サイテイタ。

ペンペン草がね。はっちゃんの家の畑に咲いていた。(→父)

<3:1, 昭52.1.18, 7:10p.m.>

A○ヌレテイル。(帽子のひもが)濡れている。

父○いいよ。(構わないよ)

少なくとも、当該幼児の自然会話では、この言い方が熟したものではない。また、関東地方には「～テンノ」「～テンダロウ」などの言い方が存するようであるが、広島県福山市地方では、これらも一般的であるとは言えない。2, 3歳期におけるA, Mの自然会話語の中には、それらが認められなかった。

ところで、方言動詞アスペクトの本領を発揮するのが、次の「～トル」ではないかと思う。中部日本以西の日本各地では、「食べている」を「食べとる」のように言うのが、一般的である。福山市で生まれ育ったA, Mも、2, 3歳期に、この地方的な言い方に親しんでいる。ただし、量的には、「～トル」は「～テル」の五分の一にも満たない。

### ㊦「動詞(連用形)+トル」

「トル」は「チョル」ともなって、2歳半ばごろから使用される。

<2:4, 昭51.4.21, 7:56p.m.>

父○頭が アセッポイ ネー。頭髮が汗っぽいね。(→M)

M○アシェガ デチョルー。汗が出ている。(→母)

母○もういいわよ。汗なんか出ていない。(風呂をわかしていないので)  
 (→M)

<2:5, 昭51.5.12, 6:44p.m., 夕食中にMの姉のKがスプーンをなめている>

M○ネーチャン コーヤッテ フンドル ネー。姉ちゃんは、こうやって、飲んでるね。(→母)

母○ンー。ナメテル ネー。うん。なめているね。

M○ンー。うん。

<2:5, 昭51.5.30, 5:57p.m., 夕食後, 居間で人形で遊ぶ>

A○オキタッタ。ネタッタ。起きてしまった。寝てしまった。

母○ナニ シテル ノ。何をしているの？

A○ダッコ シトル ノ。だっこをしているのよ。(→母)

母が「テル」で質問していても、A児が「トル」で返答しているのが、興味ぶかい。

<2:7, 昭51.7.29, 4:50p.m., 絵を見て>

M○コレ カイシュイギ キトル ソー。これは、海水着を着ているの？ (→母)

母○ソー。そう。(→M)

これらの事象は、2歳期によく行われて、3歳期には、「テル」の方が多用される傾向がある。地域への対応によれば、「トル」中心になるのであろう。家庭内では、「テル」「トル」の双方が使用されていた。3歳期が自己の精神の自覚期であるためか、周辺の「トル」から、本領の「テル」の使用へ転ずるのも、理のあるところである。「テル」「トル」に用法差が少ないために、相互の互換性も高い。

最後に、パロールの言語の特色を示す実例を掲げる。

#### 四特殊な表現

##### ①「～テルアル」

<3:0, 昭51.12.31, 10:04a.m., かたづけをさせていて>

父○しまいなさい。(→M)

M○モー チョット オチテルアル。もうちょっと、落ちている。

この「オチテルアル」という言い方は、その後二度と聞く機会がなかった。言語発達期の過渡期に使用された、絶妙な表現である。

##### ②「イテテ」

<3:3, 昭52.3.18, 8:36p.m., 便所の近くは暗いので、待っていてくれと頼む>

A○イテテ ネ。イテテ ネ。オトーチャン。居てね。居てね。お父ちゃん。(→父)

この「イテテ」は、当然にありえてよい言い方なのである。が、「座っててね」であれば「座っていてね」と分解できるのに、「イテテ」は「居て



いて」と重出させる形式はとらない習慣のため、この語形に特殊のニュアンスが生じてしまっているのである。幼児は、例外への顧慮なしに、ルールを自在に使って、もの言いをふくらませていくようである。

## 二 結果動詞のアスペクト

全体としては、この言い方が、さほどに多くない。先の「テル」では、結果の状態を表す言い方が多く見られた。それは、動作の主体の結果相であったが、今度は、動作対象の結果相が述べられる。

(一)「体言(が) + 動詞(連用形) + テアル」

<2:5, 昭51.5.25, 8:40a.m., パンを母から受けとって>

M○コレー バターガ チュケテアル。これ(パン)にバターが付けてある。(→母)

<2:5, 昭51.5.21, 6:57p.m., 夕食後に苺が食卓に出された>

M○コレ チュケテアル。苺に、ヘタがつけてある。

母○ヘタガ ツイテイル ノヨ。ヘタが付いているのよ。

M○コレ チュケテ ナイ ヨ。この苺には、ヘタが付けてないよ。

母○どうということだろう。どの苺にも、みんなヘタがついているのよ。(→M)

主格の表示が無標識であるものも、包含せしめている。これは、当該幼児の方言使用の一特色である。

<2:9, 昭51.9.20, 8:04p.m., 絵本を見ながら>

M○コレ ナニガ カイタル プ。これには、何が書いてあるの?

母○2。

M○コレワー。これは?

母○3。

以上の実例は、話題の対象となる素材が主格化されて、その結果の状態が目目されたばあいである。

これに対して、漠然と状況のみが示されて、暗黙のうちに、その場に居合わせる者が共通の理解を持つことが容認されているような用例を、以下に記述する。

## (二)「話材の当然の共有」

<3:9, 昭52.9.15, 0:30p.m., 玄関に, 南瓜の荷物が郵送されてきているのを見て>

A○カボチャ ダレガ モツテキタ ノ。南瓜を誰が持ってきたの?

母○どうして?

A○アッチニ オイテアッタ ワケ。あっちに置いてあったから。

母○ワケ?笑

<3:3, 昭52.3.26, 4:32p.m., 散歩中にペット屋の前で, 犬の絵の看板を見て>

M○アレワ ネー。カッテアルカラ コワクナイ ノー。あれはね。

飼ってあるから, 怖くないのよね。(→父)

以上の(一)(二)の用例で知られるように, 結果動詞のアスペクトでは, 動作対象の結果の状態の描写が目立つ。従って, 「あらかじめ先を見越して, 何かがしてある」という表現は, 聞き出せなかった。

さて, 2, 3歳期では, 「イル」「アル」の使用にまだ揺れが見られる。この事実は, 注目すべきであろう。

## (三)「アル」と「イル」との相通

<2:5, 昭51.5.30, 5:48p.m., 夕食後に汚れた手を父が拭いてやっている>

M○コレー ナニガ チュイテアル ノ。これは, 何が手に付いているの? (→父)

父○とれたの? (→M)

<2:7, 昭51.8.4, 8:50a.m., 朝食後, Kの座っていたイスの上の卵の黄味を母が拭く>

M○オネーチャン タマゴノ キミ コボシテアル。お姉ちゃんは, 卵の黄味をこぼしている。(→母)

<3:1, 昭52.2.6, 1:05p.m., 便所から戻って>

A○ア~~ ジュボンシタガ ジュッタアル。あゝ, ズボン下が下がっている。

父○ダメデショ。キチント アゲナクテワ。だめでしょう。きちんとあ

げなくては。(→A)

<3:4, 昭52.5.1, 6:35p.m., 台所の食器棚が開いている。>

M○アッチ アイタル。あっち、開いている。

父○アッチ アイテル。あっち、開いている。

これらは、自動詞の「付く」「ずる」「あ(開)く」に、「イル」が下屬するところを、より広い用法を持つ「アル」で代用させた例である。ただし、他動詞「こぼす」の使われた「コボシテアル」は、先の文例中の普通文として穩当ではない。むしろ、「コボシテイル」が妥当であろう。勿論、「コボレテイル」の方がより適切であるけれども、こうなれば、「オネーチャン」は感動詞に転じざるをえない。それは必ずしも、話者の意図に即しているとは言えないようである。文中の主格を、「オネーチャン」にするか「タマゴノキミ」にするか迷った挙句に、述語の「コボシテアル」に混乱を来たしたものと解されるのである。日本語の深部の文法構造の詮索が、すでに、2歳7ヶ月期に行われていることは、興味深い。

### 三 処置動詞のアスペクト

「～しておく」の言い方が、これである。ほとんどのばあいが、「て」と「お」との縮合による「トク」形を示す。

(→「動詞(連用形) + トク」)

#### ①「状態維持」

この意味での使用が、圧倒的に多い。しかも、2歳2ヶ月の早い時期においてさえ、これが表れる。生活必須の表現であると言えよう。

<2:2, 昭51.3.3, 7:15p.m., 自分でいたずら書きをしたカードを手渡して>

M○トットク ノー。とって(保存して)おくのよ。(→母)

<2:4, 昭51.4.22, 8:05a.m., 枕を押し入れにしまおうとする>

M○シマットク ノ。テガ タワナイ。しまっておくのよ。でも、手が届かない。(→父)

方言事象「タウ(届く)」が正しく使用されており、確乎たる地方人の風格を示している。

<3:1, 昭52.2.8, 10:22a.m., 風船を戸外へ持ち出そうとして>

父○どうするの？

A○アノ ネー。モノオキニ シマツトク。あのねえ。物置きに、しま  
 っておくのよ。

父○ン。うん。

「トク」を用いた例は、さかんに行われている。

### ②「放随」

これは、ある状態のまま放っておくこと、まかせておくことである。

<3:2, 昭52.2.24, 7:10a.m., お菓子の<sup>上</sup>へ白布をかぶせる>

M○コーシテ カブシトク ンヨ。オカシガ ハイッテル ンヨ。こ  
 うして被せておくのよ。お菓子が入っているのよ。

<2:11, 昭51.11.27, 0:37p.m., 父がAの湯呑に、熱い茶を注いだ>

A○シャメテオク ノ。さましておくの。

父○サマシテオク ノ。さましておくの。

冷めるまで、茶を放置しておくというわけである。

### ③「準備」

<3:0, 昭51.12.26, 6:09p.m., 夕食時に食卓周辺にMが座布団を並べる>

M○オートーシャンノ オフトンオ ナバレトイタ ノ。オートーシャン  
ココ。お父さんの座布団を並べておいたわ。お父さんはここよ。(→  
 父)

<3:8, 昭52.9.2, 10:20a.m., 出発時にMが玄関から、居間にいるAを  
 呼ぶ>

M○ハイ イク ヨー。もう行くよ。(→A)

A○チュクツトクンジャー。紙飛行機を、先に、作っておくんだ。

M○イク ヨー。行ってしまふよ。(→A)

A○イケン。だめ。(→M)

ある出来事を見越して、動作を先にし果たしておくことが、中核の意味で  
 ある。

### ④「一時的処置」

時間的所作が、とりざたされる。

<2:11, 昭51.11.22, 8:35p.m., 居間でくつろいでいて>

M○イカガデシュ カー。いかがですか。

M○カイトイタ ノ。イカガシュ カーッテ イッタカラ。書いて  
(記録) おいたの? (私が) いかがですかって言ったから? (→父)

父○ソー。そう。

<3:5, 昭52.5.22, 11:03a.m., A・Mが書斎に来て>

A○ミヨコ アッチ シメトケ。シメトケ ヨ。観世子, あっちの戸を  
締めておけ。締めておけよ。(→M)

母○今頃, 男ことばが多いんよ。男の子と遊ぶから。(→父)

⑤「意志的動作」

<2:11, 昭51.11.27, 0:46p.m., 母とMとKとが外出し, Aと父とが留守居をする>

A○オトーシャント オウチデ マットク。お父さんとお家で待ってお  
く。

A○タイヤキ アゲル ノー。鯛焼きを(みやげに)くれる?

K○オミヤゲッテ ユー ノヨ。タイヤキノオミヤゲッテ ユー  
ノ。お土産っていうのよ。鯛焼きのお土産っていうの。(→A)

<3:3, 昭52.4.9, 8:42p.m., Aは母に叱られて, 立腹している>

A○オカーシャン バカダカラ ヤマトコー。お母さんは馬鹿だから,  
やめておこう。

M○ドーシテ。どうして? (→A)

A○オカーシャン バカダ モン。お母さんは馬鹿なもの。

「待つ」「止める」などの判断を表す動詞は, 処置のしかたに, 意志的動作が濃厚に出る。

⑥「先行する行為」

これは逆接ではない。状態の維持でもあり, 準備でもあり, 意志でもあるが, 前後関係や因果関係の表現である点が, 以下の表現を特立させる。

<3:1, 昭52.2.4, 12:30a.m., ひとり言>

M○シャムイカラ ネー。シート カーディガン キトク。寒いから  
ねえ。カーディガンを着ておくわ。

〈3 : 4, 昭52.5.8, 7 : 43p.m., 家の近くのバスの停留所で〉

M○バシユガ クル マエニ マットク <sup>ノ</sup>。バスが来る前に (停留所で) 待っておくの? (→父)

父○バスガ クルマデ マットク <sup>ネ</sup>。バスが来る迄, 待っておこうね。

□「動詞 (連用形) + テオク」

〈3 : 11, 昭52.11.25, 10 : 15a.m., Aは出かける前に, 玄関の靴を全部整頓した〉

A○クチュ ナバレテオイタカラ <sup>ネー</sup>。ナバレテオイター。靴を並べておいたからね。並べておいたよ。(→母)

これは一例しか得られていない。それほどに縮約形が多用されているということである。

#### 四 終結動詞のアスペクト

「～てしまう」に相当する言い方が問題とされる。「～テシマウ」「～テシマル」「～チャウ」および, これらの過去形「～テシマッタ」「～チャッタ」「～タッタ」などが見られる。テンスは問題とせず, アスペクトを前面に立てて, 用法を記述する。

(→「～チャッタ (～チャウ)」)

この中を, 動作の終結の様をとらえて, 6つに分類する。①動作の終了, ②動作の意志的完結, ③動作の消極的完結, ④反射的動作, ⑤反期待動作, ⑥新事態動作が, それである。これらは, 微妙に用法が重なっていて, 必ずしも峻別が容易ではない。以下に若干の実例を掲げる。

##### ①「動作の終了」

〈2 : 7, 昭51.7.31, 8 : 42a.m., 下車したその電車が, まもなく発車し, 姿を消した〉

A○イッチャッタ。キチャ イッチャッタ。行ってしまった。汽車が行ってしまった。(→父)

父○デンシャガ イッチャッタ <sup>ネー</sup>。電車が行ってしまったねえ。(→A)

〈3 : 5, 昭52.6.10, 9 : 09p.m., 母が絵本の『赤ずきん』を読んでやって

いる)

M○オーバーチャン タベチャッタ ノ。ワルイ ネー。お婆ちゃんを食べてしまったの? 狼は悪いねえ。

A○オーバーチャンカラ タベチャッタ ノ。お婆ちゃんから(赤ずきんまでを)食べてしまったの?

M○オーカミ ウチュ ヒトワ。アトカラ クル。狼を撃つ人は? 後から来るの?

これらは、一般動詞「行く」「食べる」の終了動作を表す用法であった。

②「動作の意志的完結」

<3:1, 昭52.2.3, 8:14a.m., 茶殻も飲んでしまった>

A○カシュモ ノンジャッタ。茶殻も湯茶といっしょに飲んでしまった。  
(→父)

父○だめだよ。(→A)

A○カシュガ ウエニ イッチャッタ。茶殻が、お茶の湯呑の上の方に行ってしまった。

初めの「ノンジャッタ」は意志的完結であり、後の「イッチャッタ」は、反期待動作である。

③「動作の消極的完結」

<2:10, 昭51.11.1, 8:56a.m., 朝食中>

M○マナナガ オレチャッタ。バナナが折れてしまった。

<2:3, 昭51.3.29, 5:55p.m., 夕食中, 机上に汗をこぼした>

M○ココニ オチチャッタ。ここに、落ちてしまった。(→母)

④「反射的動作」

<2:4, 昭51.4.19, 0:55p.m., 夕食後に足がしびれて立てない>

A○ビエチャッタ ノヨ。しびれちゃったのよ。(→母)

母○シビレタ ノ。しびれたの? (→A)

A○ウー。うん。

⑤「反期待動作」

<2:6, 昭51.7.2, 7:28a.m., TVの人気番組が済んだ>

M○アレ モー シュンジャッタ。あれもう、済んでしまった。

<3:3, 昭52.4.2, 8:34a.m., 押入れの上の段から飛び下りて遊ぶ>

M○ト<sup>ン</sup>デモ イー。飛んでもいい?

父○アシガ オレチャウ。足が折れてしまうぞ。

M○アシガ オレチャウナイ ノ。足が折れてしまわないわよ。(→父)

⑥「新事態動作」

<3:2, 昭52.3.8, 8:05p.m., 布団の上にひっくり返って>

A○ノビチャッタ。のびてしまった!

<3:0, 昭51.2.12, 7:09p.m., 机上の蜜蜂を見て>

A○ウラガエシ シチャッタ。体を裏返しにしてしまった。

父○ちがう。ひっくり返ったって言うの。

A○オキナイ。起きない。(→父)

父○どうしてかね。(→A)

㊦「~タッタ」

これは、発音器官の未発達段階における事象であり、2歳2ヶ月から2歳8ヶ月までの間に出現する。その後は、「~チャッタ」に統合される。用法は、先の「~チャッタ」でのと同様に考えることができる。

<2:2, 昭51.3.10, 5:50p.m., 自分でボールを投げては追う>

M○アッ イッタッタ。あつ、行ってしまった。

<2:2, 昭51.2.12, 7:26p.m., 輪ゴムを切った>

M○チュイタッタ。切れてしまったの?

<2:6, 昭51.6.30, 7:48a.m., ゆで卵を話題にして>

A○ココ ナニガ チュイタッタ ノ。ここに何が付いてしまったの?

母○シオ。塩。

A○シオガ チュイタッタ ノ。塩が付いてしまったの?

㊦「~テシマッタ」

<2:11, 昭51.11.22, 8:00p.m., 人形遊び>

A○オクチガ マガッテシマル ヨ。アタマワ イー ヨ。お口が曲がってしまうよ。頭はいいよ。(→父)

<3:0, 昭51.12.23, 9:03a.m., 雑煮餅を食べつつ>

M○ナガク ナッテシマッタ。オシルダケニ ナッタ。(餅が)長くな



ってしまった。お汁だけになった。

「～テシマッタ」「～テシマウ」の言い方は少ない。縮約形は、上述の如く盛んである。

## 五 到来動詞・退去動詞のアスペクト

たとえば、「降ってくる」のような言い方が、到来動詞である。他方、「死んでいく」などの言い方があり、これを退去動詞と仮称する。幼児期のことばでは、前者の「～テクル」の方が、後者の「～テイク」よりも、多く使用されている。

「～テクル」の言い方で、圧倒的に用例が多いのは、移動動詞のばあいである。たとえば、「出てくる、入ってくる、買ってくる、汲んでくる、取ってくる、持ってくる、行ってくる、帰ってくる、やってくる、洗ってくる、落ちてくる、飛んでくる、もらってくる、送ってくる」などが、当該双生児の2、3歳期に、頻繁に使用されている。これらは本節では、該当しない。

(→)「動詞(連用形)+テクル」

①「現出過程」

<2:5, 昭51.6.2, 8:27a.m., 朝食中>

M○アブレター。卵殻が割れた。

K○アブレテ ナイデショー。破れてないでしょう。

M○コッチ アブレター。(間)キミガ デテキター。こっちが破れた。

(間)黄味が出てきた。

しだいに、卵の黄味が現れ出す様子が、表現されている。

②「変化過程」

<3:4, 昭52.5.7, 3:32p.m., 眼薬を手で振ってみて>

A○ダンダン コレ シコシニ ナッテキタ。だんだん、少しになってきた。(→母)

減少変化の過程が、表現されている。

③「動作・作用の開始」

<3:4, 昭52.4.11, 1:20p.m., TVの台の上の花瓶のチューリップの花

が開いた)

M○ミテ<sup>ー</sup>。シャイテキター。見てノ 咲いてきたノ

父○チュ<sup>ー</sup>リップ ネ。チュ<sup>ー</sup>リップの花だね。

花が開き始めたことが、話題になっている。

さて、次には、退去動詞の用法を観察する。

□「動詞(連用形)+テイク」

これも、先のばあいと同様に、移動動詞に「～テイク」の下接した形で、たくさんの実例が見られる。それらはここで省略し、専ら、アスペクト用法の認められる例に限定して、以下に記述する。

①「変化過程」

<3:3, 昭52.4.1, 6:23p.m., 夕食中に戸外を眺めて>

M○ダンダン クラクナッテイッ<sup>タ</sup>。だんだん、暗くなっていった。

父○ツ<sup>ー</sup> ネ。そうだね。(→M)

②「連動的動作」

<2:10, 昭51.10.25, 8:49a.m., 台所で母の手伝いをして>

A○ミジュガ ナガレテ<sup>ル</sup>。ナガレテ<sup>ッテ</sup> イッ<sup>テ</sup>ル。水が流れている。流れていって<sup>い</sup>てる。

以上のように、到来動詞と退去動詞のアスペクトは、微妙に内包の差違を見せつつ、大きくは対応しているのである。

## 六 実現動詞のアスペクト

ある動作が実際に実現すべく、試みたり、体験したりすることを表す。2, 3歳期の幼児は、これをよく使用する。好気心が強いせいであろうか。大きく分けて、「～テミル」と「～テミー」との2種類がある。

(→)「動詞(連用形)+テミル」

①「試行動作」

ためしに、ある動作をすることを表す。

<2:5, 昭51.6.1, 7:15p.m., 長女が母の指導で体操をする。Mが眺めていて>

M○ミヨコモ ヤッテ<sup>ミ</sup>ル。観世子も、やってみる。(→母)

<3:0, 昭51.12.12, 1:46p.m., 子らが母を探しに行ったが、見つからない>

M○オカー<sup>→</sup>シャン カイモノ イッテ<sup>→</sup>ノ。お母さんは買物に行かれたの? (→父)

父○イカナイ ヨ。行かないよ。

A○ト<sup>→</sup>ーク。イッテ<sup>→</sup>ミル。遠くかな? 行ってみる。

次には、「～テミロー」もある。

<3:6, 昭52.7.8, 0:09p.m., 机上で、医者にもらった薬の数を数えようとしている>

M○コレ カ<sup>→</sup>ジュエテミロー。これを数えてみよう。(独言)

自己への発語や、相手への勧奨に「～テミヨー」は頻用されている。

<3:4, 昭52.5.8, 7:45a.m., 幅とびをするときに>

A○アイコ ヤッテ<sup>→</sup>ミヨー カー。愛子、やってみようか? <こう言ってから幅とびをした>

<2:10, 昭51.11.2, 10:42a.m., 玄関で姉を戸外へ誘う>

A○イッテ<sup>→</sup>ミヨー ヨ。行ってみようよ。(→K)

## ②「体験動作」

体験した事柄が語られる。試みの結果が、鮮明な発見や陳腐な事実などとして述べられる。

<2:10, 昭51.11.1, 1:25p.m., 居間のジュータンのほつれ糸を探し回る>

A○サガイテ<sup>→</sup>ミタンダ。探してみたのだよ。(→母)

<2:5, 昭51.6.3, 7:58a.m., Aがくしゃみをしたので、父が窓を締めた。それをAが見ていた>

A○パタン<sup>→</sup>テ シメテミタ<sup>→</sup>ノ。パタンと窓を締めてみたの?

父○サムイカラ。寒いから。

A○チャムイカラ。寒いから?

父○ン。うん。

さて、次には、2歳期に多用された、直接的な連用形による命令法の事例を、記述する。

## ㊦「動詞(連用形)+テミー」

〈2:3, 昭51.3.11, 7:31p.m., パジャマの袖を折ってくれと頼む〉  
 M○オツテミ。オツテミ。折ってみて? 折ってみて? (→父)  
 父○オツテクダサイツテ言うのよ。(→M)

〈2:5, 昭51.6.9, 7:20p.m.〉

A○タツテミ。立ってみて? (→母)

これらの命令のものの言いは、あどけない印象を与え、表現の未分化な初期段階の状況を示す。

さて、以上は、補助動詞を介しての動詞アスペクトであった。他方に、接尾辞を使うものが、若干見られる。以下に、それらを記述する。

## B 接尾辞を使うもの

### 一 将然動詞のアスペクト

動詞に「オル」などが下接して、「将に~するところだった」の意を表す。

(→「動詞(連用形)+ヨル」)

〈2:7, 昭51.7.26, 7:20p.m., おんぶされていて、父の背から落ちかける〉

M○オチヨッタ。もう少しで落ちるところだった。(独言)

〈2:4, 昭51.4.28, 5:48p.m., 夕食中にトマトを箸で持って〉

M○コレモ タビョール。これも食べているの?(食べてもいいの?) (→母)

〈2:7, 昭51.7.31, 8:25a.m., 電車の中で、ころびそうになる〉

A○アー コロビヨッター。あっ、ころびそうだった。

(→「動詞(連用形)+ソーナ」)

これは、直前の例の用法と類似である。

〈2:4, 昭51.5.1, 4:50p.m., 母が生けた生花を見て〉

M○オチソーナ。落ちそうだ。

母○ン。何?

M○カナガ オチソーナ。花が落ちそうだよ。

(→「動詞(連用形)+ヨートスル」)

〈3:1, 昭52.1.28, 0:18p.m., 昼食中に遊びの報告〉

M○キョー ネー。ミヨコノ ディテンシャ コー ナツタ。今日ね。観世子の自転車が、こうなって（傾いて）いた。

A○オチヨートシタ。落ちそうだった。

これらの「ソーナ」「ヨートスル」については、文法的に所属の論議もあるだろうが、筆者は、広く、将然動詞のアスペクトを形成する接尾辞と認定し、ここに位置せしめた。

#### 四「動詞（連用形）+ヤメタ」

〈3：0，昭51.12.26，1：30p.m.，Aは母に叱られ，すぐに泣きやめた。それを見て，MがAをほめる〉

M○シュグ アイコ ナキアメター。すぐに愛子は，泣きやめたよ。

父○ナキヤンダ。泣きやんだ。(→M)

母○ナキヤメタでいいのよね。(→M)

「ヤメタ」も，泣くという動作を途中で停止する様を説明する付属語としての働きをしている。

おわりに

以上で，一地方都市（広島県福山市）に誕生した双生女兒の，2，3歳期における方言動詞アスペクトの形成についての考察を終える。

高橋太郎氏は，3歳～6歳幼児の動詞アスペクトの体系を報告された。筆者は，2，3歳期双生女兒について，その体系と発達とを記述した。その結果，

①高橋氏の示された動詞アスペクトの用法と筆者のそれとは，かなりよく似ていた。それは，2，3歳期において，すでに方言動詞アスペクトの大綱が完成される，ということを示しているのである。したがって，3歳～6歳期の幼児についても，当然，同様の体系的結果が得られているのであった。

②早くも2歳期に，共通語の動詞アスペクトと方言動詞アスペクトとの両方をとりこんだ，自在な使用が見られた。3歳期になると，言語の自覚化が進み，方言動詞のアスペクトよりも共通語の動詞アスペクトの方を，より多く使用しがちとなる。

如上の二つの事実が，大きく注目された。その他，2，3歳期における双

生女兒の方言動詞アスペクトを駆使する会話生活の実例を、具体的な場面と時とをあわせて、小考中に記述した。

〔参考文献〕

- ①SVENKA SAVIC: How Twins learn to Talk—A Study of the Speech Development of Twins from 1 to 3, —1982 ②Frederick N. Martin, series Editor: Language Disorders in Preschool Children, 1982 ③ALISON J. ELLIOT: Child Language, 1981 ④RONALD SCOLLON: Conversation with a one year old—A Case Study of the Developmental Foundation of Syntax, 1976 ⑤東京大学教育学部附属中・高等学校編『双生児500組の成長記録から』, 1978 ⑥ア・エル・ルリア著・松野豊・関口昇訳『言語と精神発達』, 1969 ⑦ヴィゴツキー著・柴田義弘訳『思考と言語』上, 下, 1972 ⑧ア・エヌ・レオンチェフ著・松野豊・西牟田久雄訳『子どもの精神発達』, 1967 ⑨エリコニン著・駒林邦男訳『ソビエト・児童心理学』, 1964 ⑩アレクセイ・ニコラエヴィチ・レオンチェフ著・松野豊・木村正一訳『認識の心理学』, 1967 ⑪ファース著・植田郁朗・大伴公馬訳『ピアジェの認識理論』, 1972 ⑫D. マクニール著・佐藤方哉・松島恵子・神尾昭雄訳『ことばの獲得』, 1972 ⑬L. ブルーム著・宮原英種監訳『文法の獲得』, 1981 ⑭E. オクサール著・在間進訳『言語の習得』, 1980 ⑮ポーラ・メニューク著・林栄一監訳『言語習得の原型』, 1974 ⑯中島誠・岡本夏木・村井潤一・田中昌人他「音声の記号化ならびに体制化過程に関する研究(1)」『心理学評論』, 1962 ⑰岡本夏木著『子どもとことば』, 1982 ⑱国立国語研究所編『言語発達文献・展望リスト』, 1967 ⑲P・S・デイル著・村田孝次訳『言語発達』, 1983 ⑳村田孝次著『幼児の言語発達』, 1968 ㉑村田孝次著『言語発達研究』, 1981 ㉒村田孝次著『幼稚園期の言語発達』, 1972 ㉓村田孝次著『幼児のことばと発音』, 1970 ㉔村田孝次著『幼児の表現生活』, 1971 ㉕大久保愛著『幼児言語の発達』, 1967 ㉖大久保愛著『幼児のことばと知恵』, 1975 ㉗大久保愛著『幼児の文構造の発達——3歳～6歳児の場合』, 1973 ㉘高橋太郎著『幼児語の形態論的分析』, 1975 ㉙吉川武時著『現代日本語動詞のアスペクトの研究』, 1973 ㉚国立国語研究所編『幼児のことば資料』(1)(2), 1981 ㉛藤原与一著『幼児の言語表現能力の発達』, 1977 ㉜野地潤家著『幼児期の言語生活の実態 1』, 1977 ㉝早川勝広他『幼児の言語表現の教育』, 1980 ㉞岩淵悦太郎・波多野完治・内藤寿七郎・切替一郎・時実利彦・沢島政行・村石昭三・滝沢武久著『ことばの誕生——うぶ声から5歳まで』, 1968 ㉟岩淵悦太郎・村石昭三編『幼児の用語』, 1976 ㊱矢田部達郎著『児童の言語』, 1956 ㊲ザポロージェツ, ア・ヴェリシナ, エム・イ編著『乳幼児のコミュニケーション活動の研究』, 1979 (1983. 8. 28)